

2014 年度 FD 活動報告

フェリス女学院大学 FD 委員会
委員長（学長） 秋岡 陽
副委員長（教務部長） 藤本 朝巳

FD 活動の主な目的は「教員が授業内容・方法を改善し向上させること」にあり、また現代は、その活動を学内外に公表することが義務づけられています。フェリス女学院大学は、これまでも、さまざまな活動に取り組み、継続的に諸活動を推進してきましたが、2014 年度は、さらに加えて、科目ナンバリング制の導入、カリキュラム・マップ Ver.3 の完成まで、「カリキュラムの構造」という側面からの検討を重ね、それぞれを形にすることができました。これらは学生要覧、開講科目表、Web シラバス、科目紹介サイト FerrisNote でも機能を果たせるようになりました。カリキュラム・マップに示された段階性・体系性や開講科目表におけるレベル表示は、学生の主体的な履修計画に役立つものと期待しています。また、このように視覚化して示したことは、今後のカリキュラムの点検、改善の指針となると思います。

授業アンケートについては、教員の授業点検のみでなく、学生が自らの学習を振り返り、教員と学生が共により良い授業を作り上げていくことを目指してきましたが、2014 年度は設計から予備調査までコミュニケーション学科の多大な協力を得て実施にこぎつけました。

また、2012 年度に実施した学修行動調査の結果に基づき、初年次教育のありかた、「論理的に思考し、書く力の育成」を中心とした 2 回の講演会を開催しました。ここでは、教員・職員によるグループワーク、各学部、部署からの事例報告を採り入れ、手法や課題の共有という目標を達成することができました。ここで得られた知見は、各学部でのカリキュラム検討や事務部署における学生対応などに活用されています。

目次

1. 科目ナンバリング制の導入	2
2. 第 1 回 FD 講演会	3
大学生に必要な「書く力」を育成するには ～「問いの逆算」という指導法～	
3. 第 2 回 FD 講演会	7
思考を鍛えるアカデミック・ライティング	
4. 授業アンケートの再構築	15
5. セミナー参加報告	15
(1) 「私大連 FD 推進ワークショップ」(専任教職員向け)	16
(2) 「私大連 FD 推進ワークショップ」(新任専任教員向け)	18
6. 2014 年度活動内容	19

カリキュラムにおける位置づけ、特徴、レベルという基本情報をコード化することにより、設計上の意図を明確にする目的で、2015年度から科目ナンバリング制を導入しました。

ナンバリングコードは、「所属群」「分野」「レベル」「使用言語」を表すアルファベットと数字の組み合わせによって表示します。

大学FD委員会での議論を経て、従来の伝統的学問分野ではなくリテラシー別に区分している基礎教養科目や他学部・他学科履修（開放科目）という本学の特徴を活かすため、「所属群コード」と「分野別コード」を併用することとしました。

なお、2015年度より、下記の媒体で活用し、全学的な共通性をもって示すこととします。

- (1) 学生要覧（カリキュラム・マップ）
- (2) 開講科目表
- (3) Web シラバス
- (4) 科目紹介サイト FerrisNote

また、ここで定めたレベルをカリキュラム・マップに反映させ、履修系統図としての機能を高められるようにしました。

>>カリキュラム・マップの例についてはこちら

>>開講科目表の見方についてはこちら

日時：2014年7月23日（水）16:30～19:00

会場：緑園キャンパス 7305教室

プログラム

第1部 基調講演

初年次教育の焦点

大学生に必要な「書く力」を育成するには ～「問いの逆算」という指導法～

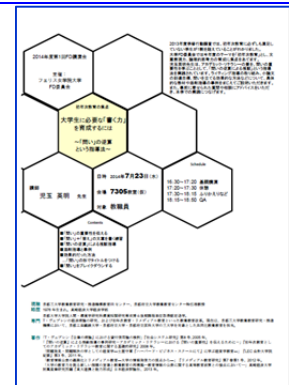
第2部 グループディスカッション・質疑応答

講師： 児玉 英明 先生

（京都三大学教養教育研究・推進機構教育 IR センター、京都府立大学教養教育センター 特任准教授）

司会：大谷 智夫 教務課長

対象者：専任教職員



※クリックすると大きく表示されます

基調講演

「初年次教育」におけるライティング教育の具体的な取り組み事例や指導法について実際の教材や添削実例をもとに紹介があり、その目的と意義をどのように設定することこそが大学の戦略として肝要であるとの解説がありました。

I はじめに—大学の教育力をどこに見るか—

入試形態の多様化により、学力レベルの下がる層が入学するようになっているにも関わらず、大学ではこの層に対応した学習支援を十分に講じることができていない。このような事態が広がる中で、社会の側から大学の教育力を見る視点として初年次教育、リメディアル教育にどのように力を入れているかが着目され、大学選びの一つの指標となっている。

初年次教育はその性格がおおよそ「大学における友だちづくり」「図書館の使い方やパソコンの使い方などスキルを学ぶ」「論理的思考力やアカデミック・ライティング能力の向上」の3つに分類される。「R&R（入門ゼミ）」「導入演習」のシラバスをもとにフェリスの導入教育の性格を表すと、1点目のスキルを学ぶところに重点を置きつつ、3点目の書く力（ライティング能力）の向上を目指しているが、その具体的指導方法がはっきりしていない。この書く力が、高校までの教育で力点を置かれていないにもかかわらず、大学、大学教員に重要視されているポイントであることから、初年次教育において重要視すべきは書く力であり、これを柱にしてスキルの学びを付随させるという方策への転換が必要。

II 教育実践事例①—香西秀信『反論の技術・実践資料編』に学ぶ—

初等中等教育（小学4年生）での実践から学ぶ事例として、講演者が担当する「現代社会に学ぶ問う力・書く力」の授業での適用と実際の指導法を紹介。具体的にはある文章に対して反論文を書かせることで

- i)論理的な文章を書けていないことを実感させること
- ii)推敲に力を入れること
- iii)引用と箇条書きをマスターさせること

から始めていくことが述べられました。

III 教育実践事例②—岡田寿彦『論文って、どんなもんだい』に学ぶ—

学生は論文とはどのような文章か根源的な問いがないままにレポートを書いているため、知識や心に浮かんだ言葉の羅列でしかない文章になってしまっている。論文とは、「問い」に対する「答え」としての自分の「考え」を述べる文章であって、この型を常に意識しながら書くことが求められる。ただ心に浮かんだことを書くだけでは論文とは言えない。答えや考えを導

くための「問い」の存在を意識することが重要であり、岡田の提唱する論文構造分析表を用い、論理的に構成された文章の純粹型を学生に提示することで、学生に自分の文章の足りない点を意識させ、「問い+答え」を明確にした文章に近づけていく。

岡田のテキストは予備校の受験用参考書であるが、小中高と学校において論文を書く経験、訓練をしていないほとんどの学生にとっては非常に有益。

IV 教育実践事例③—山田ズーニー『伝わる・揺さぶる！文章を書く』に学ぶ—

この事例は、前述の事例とは異なり問いの立て方を学ぶのではなく、書きあがった文章から推敲の際に「問いを逆算する」ことで原稿を完成させるまでの過程を見せる指導法である。誰も一回で論理的な文章を書きあげることが不可能であり、推敲を重ねて初めて論理的な文章を作成することができる。そのためには自分で自分の文章を添削、推敲できるように指導することが学生の「書く力」の向上につながる。

V 教育実践事例④—人生相談の回答者になる—

「個別・具体的なことがら」と「一般的・抽象的なことがら」の往復運動の養成を目的として、実際に新聞に掲載された人生相談への回答を作成するという指導方法。回答作成を通じて、相談者の経験に寄り沿う「個別・具体的なことがら」としての回答でありながら、一般読者や同じような悩みを持つ読者にも役に立つ、参考となる「一般的・抽象的なことがら」としてのアドバイスにつなげていくことのトレーニングが可能となる。

以上の紹介した事例での到達目標は異なっている。肝心なのは、初年次教育におけるライティング教育が目指すべき到達目標をどこに置くかである。

一番基本的なレベルであれば、意見文を書けることを到達目標とするのが適当。高いレベルでいうと最終的にミニ卒業論文レベルを目指している京都大学での初年次教育（ポケット・ゼミ）がある。到達目標の置き方は初年次教育であっても教養教育と専門教育とは異なる。専門教育での初年次教育はどうしても専門に軸足を置いたものにならざるを得ない。であるならば、冒頭に述べた入学者の学力低下、社会から新たなニーズとして要求されている汎用的能力の育成という意味での初年次教育、リメディアル教育に応えるのは教養教育ではないか。

教養教育は1991年の大学設置基準大綱化以降20数年低迷してきたが、ここ数年再びその重要性、必要性が問われるようになってきた。その理由は、第一に人間としてどのように生きるか、第二に自分はどのような社会に生きているかということを考えなければならなくなってきたためである。

原発の問題など社会的な問題、状況認識を問わずにいられない事態が、教養教育の必要性を召喚しているといえる。専門教育で学問のディシプリンを授ける一方、学士力に含まれる汎用的技能、態度・志向性の育成が必須である。大学教員も、自身の専門科目だけを教えるのではなく、汎用的技能の向上につながる教育を担う者としての意識の変革が必要であり、それがこれからの大学教育に求められていることである。

グループディスカッション後の発表

グループディスカッションの後は、各代表者から発表があり、これに対して児玉先生から講評をいただきました。

グループ①

- ・卒論指導などでは、体裁や技術中心となり、「問う」重要性を気づかせることが抜けていた。
- ・卒業論文を必修としない学科も含め、共通のプログラムとして（例えば共通の教案：台本を用いて）提供する必要がある。そのためには、指導可能な教員を育成しなければならない。
- ・学生間の相互批評は有効だが、教員側の指導と信頼関係が前提である。
- ・学生は、書いたものがどう見られるか、どう見せるべきか、そもそも何を問うべきかという意識が低く、他人に解を求める傾向がある。

グループ②

- ・「Why・Because」の「Because」が述べられない学生は、やはり圧倒的に読書量が不足して

いるのではないか。

- ・書くスキルと思考力の育成をどう両立させるか困難を感じる。レポートなどでは履修者が多すぎると指導しきれない。書かせるばかりでケアに手が回っていない。

グループ③

- ・事務窓口対応の経験では、質問の内容を明確にできず、インターネットの曖昧検索のように単語（キーワード）だけを発して意味を掬い取ってもらおうとする学生がみられる。

グループ④

- ・(教養教育を担当する教員は、自分の専門科目のみを教えるのではなく、授業を通じて「ライティング能力」や「プレゼンテーション能力」や「論理的思考力」など、学生の汎用的技能を向上させるようなプログラムを開発する必要がある。というご指摘に対して、基礎教養・総合課題科目運営委員長の立場からの感想)
- ・断片的に考えていたことが繋がった。問いを立てる訓練は、初年次のみならず4年間有効と思われるが、第三者としての社会人の力の借り方、ライティング能力強化に職員の力を活用した事例があれば知りたい。

【講師コメント】

- ・学生が窓口での相談や申し出内容を明瞭にできず、キーワードを並べるだけ、という実感は職員だからこそ気づく点である。教員は「書く力」のスキル向上に比重を置くが、そもそも「問いを立てる」ことができていないという実態に気づきにくい。初年次教育の方向性を決めるヒントはこういうところにある。
- ・卒業論文では情報量が多く、効率的な書き方に指導は偏りがちだが、初期段階では事実の羅列でも良い。対話し、質問して引き出す、つまりケアをすると学生の方から解が出てくる。15回全てを「問いを立てる訓練」に当てても良い。
- ・所属大学での担当授業は、大学の研究授業に指定されていて、単発のテストによらないポートフォリオ評価を要請されている。レポートにはマーカーやコメントにより「読んだ形跡」を残しているが、1時間では4名分が限度で、1クラス分(30名)ではおよそ8時間、つまり日曜日全部をこれに費やす。相当な労力を要するが、書かれたものと学生の顔が一致するようになる。これ以上のクラスサイズだと難しい。
- ・読書量は、東大、京大でも多くはない。学生のほとんどは、予備校で教えるような徹底的に分析的に現代文を読む訓練を高校の授業で経験してきていない。例えば「つまり」「しかし」といった接続詞の後の記述に注目すべきといった観点を知らない。そこで、音読させたり、ラインマーカーを引かせるなどして強弱をつけた読み方を指導し、書く力に繋げている。
- ・プレゼンテーションでパワーポイントを用いると、学生は問いを立てずに聞き流してしまうことがある。配布資料を読むことで文章の構造を理解させるため、あえてパワーポイントを用いないという指導法もある。
- ・授業では、学生に毎回自己紹介の3分間スピーチをさせている。自己紹介だけで3分間という時間を持たせることは難しいと実感させる意味もあるが、これに対して3人程度に必ず質問を求める。質問は「わからないとき」にだけするものではなく、さらに深く聞きたいこと、あるいは相手の様子から、もっと話したい気持ちが汲みとれることを見極め、的確に問うという姿勢を身に付けさせるため。
- ・初年次教育の目標をどこに置くのか、「理由付き意見文まで」とするのか、個人研究レベルまで求めるのか、といった全学的な共通認識、ビジョンが必要である。教員は、初年次の段階でミニ卒論的なレポートを教えようとするが、「理由付き意見文」や「人生相談への答え」までであれば、短期間で効果を得ることができる。
(・表現力があり、語彙の豊かな文章を書くには、確かに一定量以上の読書が必要であり、教えられるレベルを超えている。別次元の問題。)
- ・教員と職員の間に関与される「第三の職域」の活用が注目されている。京産大の事例では低単位・低意欲学生フォローアップのための「キャリア Re デザイン」科目におけるファシリテーターとしての働きが挙げられる。学生支援に関心のある職員が面談の末、当該科目の履修を薦め、グループワークを通じて自己開示を繰り返すことにより意欲を引

き出すというもの。担当者はファシリテーション研修受講を必須とし、グループワーク運営のスキルを向上させたいうえで授業に参画する。

全体総括

今回のFD講演会を通して、深く考えさせられたことがありました。その一つは、大学が学生に対してなすべき「教育」の質（内容）は何かということでした。もちろん、大学は学問を教えなければなりません。これは何にもまして重要なことです。しかし一方で、何学部であれ、学生が卒業後に生きていくための備えもすべきであるということも、あらためて考えさせられたことでした。学生は、在学中にそうした備えも同時にしていかなければなりません。このことが、「書く」指導においても考慮すべきことと思われまます。卒論を書き上げるためのアカデミックなライティング指導は必須であり、重要です。しかし一方で、学生は就職のためのエントリー・シートをいかに的確に書くか、もっといえば、各事務部に提出する、さまざまな申請用紙などに、自分の意思を適切に書けるようになることも、学ばなければなりません。そういうことは、私たちは自分で覚えた、また社会に出て失敗するたびに、また上司に書き直しするよう、厳しく注意されながら、覚えていった？ かもしれません。しかし将来のため、そうしたことを在学中に学ぶことも必要ではないでしょうか。では、どこでどう教えるか……このことこそ、初年次教育や基礎教養科目の担うべき課題の一つではないでしょうか。

もう一点、今回のFD活動で、教職員が部署をこえて同じテーブルについて意見交換ができたことは、有意義なことでした。FD活動の課題は多いですが、大学の教職員が互いに理解し、協力して、大学のさまざまな改善・改革ができればと願っています。

大学FD委員会副委員長
教務部長

藤本 朝巳

講演会、グループワークの様子

講師 児玉 英明 先生



日時：2014年10月22日（水）
第1部 16:30～19:00 第2部 19:00～20:00

会場：緑園キャンパス 7103 教室

プログラム

第1部 基調講演

初年次教育の焦点

思考を鍛えるアカデミック・ライティング

事例報告

由井 哲哉 文学部英語英米文学科教授

大西比呂志 国際交流学部国際交流学科教授

谷口 昭弘 音楽学部音楽芸術学科准教授

永井 択 就職課長代行

パネルディスカッション・質疑応答

第2部 情報交換会

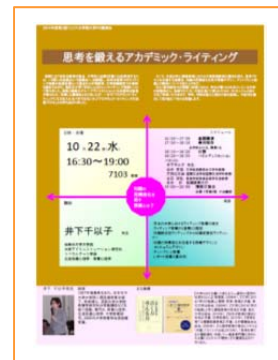
講師：井下 千以子 先生

（桜美林大学大学院 大学アドミニストレーション研究科 リベラルアーツ学群

生涯発達心理学・教育心理学）

司会：大谷 智夫 教務課長

対象者：専任教職員



※クリックすると大きく表示されます

基調講演

初年次教育の焦点 思考を鍛えるアカデミック・ライティング

1 大学におけるライティング教育の目標と目的

冒頭に、講演者から「大学での学びとは何か」という視点からみた「書く力考える力」に焦点をあて、大学内での問題を共有し、目標や目的を認識することが必要であることが述べられた。

ライティングの指導の例として、日常行われている授業やゼミにおける文章の添削指導をとりあげ以下説明がなされた。

- (1) 漢字や表現、語彙の誤り、文のねじれ：添削指導で対応可能。
- (2) 文章の構成やテーマ設定：書き終わった後で添削するのは難しい。書く前の段階でチェックすべきである。
- (3) 引用のしかた：論文の際引用は必須である。しかし引用の方法を教えるのではなく、なぜ引用が必要なのかを考えさせることが重要である。盗用の意識がなくコピーを繰り返す学生が多いのはこの点が欠けているからである。
- (4) 課題の設定：学生は、授業内容が理解できていないと意図に沿った課題に取り組むことができない。教員側でどのような課題を設定するかという点が重要である。

その上で講演者から、書くことの前に考えることが重要であること、学生の書く力の現状を把握し大学としてどういう学生を育てたいのかという教員側の共通認識、また職員の学生に対する支援のあり方を相互に考えることが必要であるとの問題提起がなされた。

2 ライティング教育の現状

大学におけるライティング教育の核となる3要素と5類型が示された。

(1) ライティング教育の3要素

- ① ディシプリン：専門分野・思考様式
- ② 学習技術：レポートの書き方、ノートの取り方
- ③ メタ認知：自分を対象化し俯瞰することによって相手に伝える文章を書く

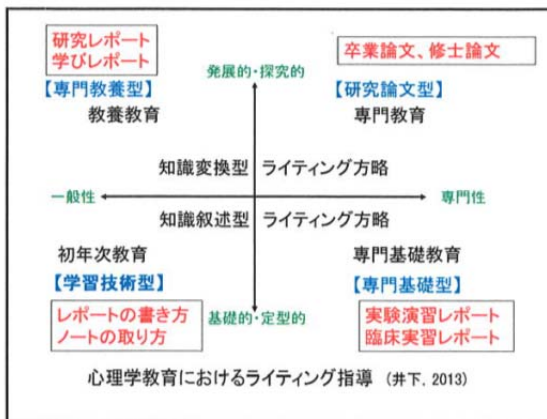
これら3つの要素を提示したうえで、大学教育で育むべき「書く力考える力」とは、「ディシプリンでの学習経験を自分にとって意味のある知識として再構造化する力」、つまり学んだことを組み立て直す力であることが述べられた。

(2) ライティング教育の5類型

- ① 学習技術型：初歩的なアカデミック・ライティング、汎用性の高いレポートの書き方
- ② 専門基礎型：専攻分野に特化した論文・レポートの初歩的訓練、実習・実験演習レポート
- ③ 専門教養型：専攻分野に限らず、多様なディシプリンでの幅広い学びを重視したレポート
- ④ 文章表現型：ディシプリンの要素を含まない文章表現指導を目的とした文章表現指導。
(就職活動の文章指導も含む)
- ⑤ 研究論文型：研究レポート、卒業論文、修士論文

講演者の所属する桜美林大学では、④文章表現の授業を全学生必修としており、新聞社のOBや演劇のシナリオライターなどが指導していることが紹介された。

この5類型のうち④文章表現型を除く4類型は学士課程における教育内容の区分（以下図参照）にあてはめることができ、かつ相関関係にあることが述べられた。



学士課程カリキュラムマップ (井下, 2008,2013)
心理学教育におけるライティング指導 (井下, 2013)
より

3 ライティング教育の課題

次に、ライティング教育における3つの課題が示された。

(1) 発達観の転換

ライティングの指導は初年次で終わるものではなく、広い視野に立ち、見通しを持って考えさせることによって学生は大学での学びと経験を意味づけることができるため、4年間を通じた指導が必要である。

(2) 学習観の転換

レポートの型などのテクニックを教えることや知識を積み上げる「教え込み」だけではなく、得た知識を再構造化し学びを深め、知識叙述型ライティングから知識変換型ライティングへの転換が深い学びにつながる。

(3) 授業観の転換

大学4年間のカリキュラム全体にわたる考えるプロセスを育成する授業観の転換が必要である。

4 思考を鍛えるライティング教育

前述の課題を受けて、講演者からレポートや論文の指導について、著書である『レポート・論文作成法』を用いて事例の紹介と指導上のポイントについて述べられた。

(1) レポート・論文作成の5ステップ

前提条件：レポート・論文の型を見極める

説明型：内容を理解したかどうか、学習成果の説明を求める

報告型：実習等での成果報告

実証型：与えられたテーマについて調査を行い、その結果に基づき実証するもの

論証型：与えられたテーマについて論証するもの

上記を踏まえたうえで

- ① テーマ決定：課題に対して得た疑問点を洗い出し、資料を調べ、テーマが決定するまで広げて絞り込む作業を繰り返す
- ② 調査：論文のテーマから先行研究に位置付けるための情報収集（下調べ・文献検索・文献入手）を行う

- ③ 組み立て：序論の構成要素をもとに、主題文を書き、アウトラインを決定する。
- ④ 執筆：定型のフォーマットを使い、執筆する。題名をつけ、キーワードとの整合性を考える。
- ⑤ 点検：読み返して推敲する。ルーブリックを用い客観的にチェックする。

自分がどのような課題を出されたのかを正確に理解して書くためには、調べる力を身につけること、見本レポートにしたがって①から⑤を粘り強く往復し文章を整えていく方法が有効である。見本を示すことは、単なる感想文ではなく、学生自身がどのような観点からレポートを書けばよいかを認識させるために必要である。

また、レポートを作成後、学生がルーブリックを利用して自己評価し、さらに学生同士でピア・レビューなどを行い客観的に読む訓練をさせることが自分の書いた文章を客観的にとらえる力の育成につながる。ただし、ピア・レビューの際の注意点として、ただ点数をつけるだけでなく、優れた点を文章にして表すなどの工夫が必要である。

さらに、「批判的思考力」の指導においては、「批判的」という言葉が否定的に捉えられないよう、異なる立場からの意見を取り上げ、理論的に批判することでより説得力のある文章へと組み立てていくものであることを学生に理解させる必要がある。

(2) 研究レポート・論文の書き方の指導

論文作成にあたっては、序論を書く段階での重点的な指導が必要である。何回でも書き直しをさせ、目的を明確化させることで、論文を組み立てる力につながる。

5 カリキュラム全体を通じた「書く力考える力」の支援

講演者から、多様なディシプリンと学生のアイデンティティの発達を視野に入れた支援の実例としてカナダのアルバータ大学のカリキュラムが紹介された。

「書く力考える力」すなわち「知識を再構造化する力(自分の考えを自分の言葉で表現する力)」の育成には学士課程4年間のカリキュラムを通じた支援が必要であり、大学教育において最も重要である。

講演会、事例報告の様子

講師 井下千以子 先生



事例報告① 由井 哲哉 教授



事例報告③ 谷口 昭弘 准教授



事例報告② 大西比呂志 教授



事例報告④ 永井 摂 就職課長代行



事例報告

事例報告 1

担当者 文学部 英語英米文学科 由井 哲哉 教授

答えのない問いへのアプローチ

アカデミック・ライティングの指導にあたって最も苦心するのは、「答えの出ない問いに対するレポートをどう書くか」ということである。特別なメソッドがあるわけではないが、ゼミで実践しているのは「知っていること」と「知らないこと」の境界線をわからせるということ。

■「R&R (入門ゼミ)」

「R&R (入門ゼミ)」では、まず演繹法。マインドマップを用いて「大雑把でも良いから全体を把握する」訓練を課す。これで知っていることと知らないことの区別が可能になる。次に情報カードを用いて読書から得た具体例を片端から書かせ、具体例から全体を理解する帰納法。この両方を取り入れている。

■3・4年次ゼミ

3・4年次ゼミでは井下先生が言われた「批判的に」というより「多面的に」課題にアプローチさせている。私の専門のシェイクスピアには物事を多角的に見る視点が至るところに見られ、それを題材にできるだけ多様な見方で物事を判断するように指導している。例えば、『ヴェニス商人』のシャイロックという登場人物をみるときに、日本人、20歳、未婚女性という視点と黒人、70歳、アフリカ人でユダヤ教徒という視点では方向性が違う。さらに、「情報の落差」。これをうまく利用しているのが『ロミオとジュリエット』。文学作品を通じてどの人物がある情報を知っていてどの人物は知らないのかという「境」を知ることができ、自分と異なる立場に立つこともできる。これが答えのない問いへの訓練であり、エントリー・シートより上位段階の指導ではないかと考えている。

事例報告 2

担当者 国際交流学部 国際交流学科 大西比呂志 教授

書く前に考えさせ、筋道をつけさせる

学生の「書く力」をめぐるのは、これがスキルの問題ではなく「問う力」に関わる根本的な問題であることは改めて言うまでもない。どのように個人的嗜好や関心にとどまらず、他者・社会に開かれたアカデミックな問題を設定し問いかけをさせ、学生のそうした試行錯誤を書く行為につなげるか、演習科目のなかで指導している。

■1・2年次ゼミ

「導入演習」、「基礎演習」(1～2年次)では簡単なパターン化したフォーマットを用いて繰り返し論理的構成の形式を憶えさせる。手作りのフォーマットは、「テーマ、タイトル、サブタイトル」の次に「はじめに、展開(3つの節)、おわりに」で構成。各項目に順次単語を入れさせ、次にあてはめた単語について言葉で補い説明させる。こうして説明させると、何らかの道筋がついてくる。3つの章、節は論理の基本。展開があり、形を覚えるのには適したリズムである。

レジュメを作成させる際、メモは認めるが、原稿は持たせない。こうすることで「考え」、筋道がつくようになる。そのうえでレポートを書かせる。まず書くことよりも、考え、筋道をつけさせることを心がけている。

■3・4年次ゼミ

「専門演習」3年次では主にフィールドなどの実践活動、4年次では卒論合宿を実施して、体験的に書かせることを重視している。実習的なものを必須とし、人に話を聞きに行くことなどを奨励する。そうすると、自分の関心と無縁のことはテーマにできない。「卒業論文」に向けては、こうした体験的なことを半年ほど課す。モチーフができた段階で、合宿で集中的に鍛える。本格的に書く前の準備が重要。書くことを急がせない。自分のなかに書くモチーフが蓄積され、それを論理として組み立てること、培われるのを待つ。井下先生の体系的に指導、再構造化のご講演を伺い、自分が手さぐりでやっていることの裏付けを得ることができた。

事例報告 3

担当者 音楽学部 音楽芸術学科 谷口 昭弘 准教授

「才能」ではなく「技術」として

■2013年度から始まった「基礎演習」

音楽学部音楽芸術学科では、2013年度から初年次教育科目として「基礎演習」を開始した。初年次教育では、文章を「才能」ではなく「技術」の問題として考える発想が必要。いわゆるアカデミックスキル全体の修得を目標とする。担当は非常勤講師。

「自ら問いを立てる」訓練を課し、最終的にレポートにまとめる。独創性(著作権)、学問上のモラル(剽窃)も取り上げ、テーマがおもしろいだけでなく、結実するのか、本当にできるのか、学生間で意見交換させる。基本的な情報収集の方法として①図書館ツアー、②文献表作成を取り入れている。学生からは図書館に音楽関係の本がこんなにあったのかと驚きの声があがる。引用の仕方、出典の明示については学科独自のマニュアルがあり、CD、DVD、テレビ番組といったメディアの扱いを説明している。

プレゼンテーション実習ではこれを行う意義として、関心あるテーマを売り込む、面接などで将来役立つこと、準備不足、説明不足などにより、制限時間の中で失敗することの大切さも伝えている。

■成果

2013年度「基礎演習」(1年次対象)の成果としては、まだ履修済みの学生は2年次なので卒業論文の質にどう寄与するか検証できていないが、2013年度「応用演習」(2年次対象)を経た学生は、リサーチの基本はある程度できている。調べることが苦でなく、抵抗を感じていないようであり、プレゼンテーションは一定レベルのものを短期間に仕上げることができる。

専門科目「音楽ジャーナリズム」では、アカデミック・ライティングではないが、好きな音楽、ジャンルについて書かせる。CDといったメディアや放送原稿、楽曲の聞きどころ、演奏会プログラム、コンサートレビューなど実用的なものを扱う。400字、800字、1000字程度と定め、技術的な訓練に集中する。よくあるのは、やはり「主語がない」「主述のねじれ」「同じ文章が重複」など。感想文にならないように「○○と感じる」「思う」の文末表現を削除させることもある。高校までとは違う文章だと理解してもらう。よいアイデアを持っている学生は多く存在するが、読み手が関心を持ち論理的に納得する文章を書くには、書いてもらったものをフィードバックする機会を多く持つことが必要である。

提出されるコメントシートには良い視点があり、感動する。

卒業論文に向けては、技術的問題に加え客観性のある語彙や言い回しの知識も必要であり、学生本来の持ち味を活かしながら、よりよい書き方が開拓できないかと模索している。

事例報告 4

担当者 永井 択 就職課長代行

赤ペン添削でなく、対面、問いかけによる指導

就職課では日々の業務の中で学生の書いた文章を読む機会が多くあるが、指導する際に課題に感じていることを共有したい。主には次の3点である。

- ①質問への回答になっていない
- ②日本語の使い方に問題がある（一文が長い、主語述語がおかしい（主述のねじれ）、前後のつながりが不明、語彙の誤り等）
- ③読み手の立場になって書かれていない。読んだ相手はどう思うか想像できていない

■3つの問題点

資料は授業科目「キャリア実習（インターンシップ）」報告書。これらは極端な例ではなく、一般的、ごく平均的な学生の文章で、原文ママを載せている。また、学生には実習先（企業担当者）に見せるという前提で書かせている。

まず①についての例1では、「目標に向けて、どのように研修に取り組んだか」への答えとして「目標」が書かれておらず、「どのように」の部分がない。よくあるパターンである。

次に例2「研修先について理解できた点は何か（研修前後を比較して）」に対し、研修先ではなく社会人について書かれ、研修前後の比較はなく、「感じたこと」が書かれている。

例3では就業観の変化を問われているのに、自分の書きたいことを書いている。

②（日本語の使い方に問題）は最も指導に困難を感じる。わかりづらい文章になっていることに本人が気づいていない。これも特に「できない」のではなく、ごく平均的な学生である。

③は想像力欠如による。正直すぎる感想や中傷と取られかねない報告など、社会人としての見識を問われる書き方をしてしまう。例6では「買う気のないお客様に買ってもらう」ではなく「潜在的なお客様に対し」「より商品の魅力を伝えるためには」といった言い換え表現ができていない。

■指導の基本方針

こうした3つの問題点を踏まえ、指導していかねばならない。

報告書の到達目標は特別高いものではなく、研修先（企業担当者）に提出して恥ずかしくないレベル。

具体的な指導の基本方針としては「赤ペン添削はしない」。赤入れをして渡すと、学生はこれが正解で、完成形だと思ってしまう。

学生を呼び出し、面談して具体的に「目標は何だったか」「どのように取り組んだか」問いかけ、メモを取ってもらう。例1のケースでは面談は4回に及んだ。面談の1回目は90分を要し、メモも多い。2回目では若干メモが減り、3回目は微修正で済む。4回目で完成した。指導には計4～5時間かかり、マンパワーにも限界がある。大学全体として書く力の底上げが必要と感じる。

質疑応答

Q. 1年次ゼミの規模（25人程度）でレポートのレスポンスを行うとかなりの時間と労力を要する。赤ペン先生にならないで済むような工夫はあるか。

A. 教員の応答（レスポンス）で学生の書く力を育成することより、学生にセルフチェックする力をつけさせる＝考える力をつけさせる、という観点がよいのではないか。

自分の授業では次のような方法を用いている。

学生同士の視点

- ・まず課題に対するレポート本体をいきなり書かせるのではなく、100字程度の主題文を書かせる。
- ・次に書いたものについて学生ペアでお互いに点検評価する。
- ・更に今度は6名程度のグループをつくり、グループ内で自分の書いた内容とペアでの点検評価結果を口頭発表させる。

文章（主張）のブラッシュアップ

- ・初めに作成した文章に説得力を持たせるため、グループ内で出た異なる意見を紹介し、自分の意見を明確にした文章を再度作成する。
- ・これについてまた上記と同様にペアでのチェック、グループでのチェックを行う。

教員の指導

- ・学生には文章を2部作成させる。1部は学士同士のチェック用に用い、もう1部は教員が集める。
- ・集めたものを（読むというよりは）見て、指摘すべき点に赤をいれたものを授業内でプロジェクタ画面で紹介しながら授業を行う。

Q. 学生同士でピア・レビューする際には、学生同士のやさしさや遠慮が壁となる。これを崩すには学生間でのラポール（信頼）がなければならないが、そのための工夫、アイディアは？

A. ただ、読んで問題を指摘せよ、といっても学生にはできない、わからない。学生同士でチェックを有効なものとするためには、チェックの視点を学生に理解させることが重要。これには自己点検評価シート（ループリック）やフォーマットが有効となる。

またラポールを作るという点では、専門科目でのライティング指導がその鍵ではないか。ライティングのための授業も必要だが、専門科目の授業の中で学生がその専門をどう理解しているかを書かせる、また専門への関心からテーマを立てさせる、ということが重要。この場合、学生は同じ専門科目を学ぶ、修得するという目的を共有しているため、ラポールの土壌がある。この中で学生同士のピア・レビューを行うと、学生は相互の視点の違いに驚き、それを楽しむことができる。

Q. 教員にとっては書く力の育成は、卒業論文を一里塚としてその先の成長を見据えた長期的なものとして捉えている。その一方、就職課の事例報告で短期的（促成）の必要性も理解できる。この相対する両者をマッチングすることは不可能なので、大学というシステムのなかでこのギャップを埋めることを考えることが必要なのではないか。

A 1. 書く力は長期的な視野で育成するということはもっともである。

しかし明日提出するエントリー・シートをいまから何とかしてほしいと、白紙状態で窓口に相談に来るといった実態もある。これでは最低限、相手に読んでもらえる形にするだけで精いっぱい、中身については指導が及ばない。

就職活動を始める時期までに、形を整えるまでの書く力は最低限必要ではないか。

そのためには、4年次からの卒業論文に取りかかるころからではなく、それまでの段階で、ある程度の書く力をすべての学生につけて欲しい。

A 2. 事例として挙げたアルバータ大学（カナダ）のライティング・イニシアティブという活動では、学生の文章力を向上させるために、上からのFDではなく、全教員に「どの科目で、どの時期に、どのような課題のライティングを課しているか」を調査するところからスタートしている。

この回答を教員がみることによって、4年間の学生生活全体で学生にとってのライティングの負荷の量、時期、種類を理解し、全学的なカリキュラムの視点から見直すきっかけとした。

就職活動のエントリー・シートそのものをとればライティングだが、本質はその学生が大学生活でどのようなキャリアを積んだかを現すものであるはず。そうであるならば、学生は自分で自身の大学生活を評価できるようになっていなければならない。

学生が履修する科目の中で、意識的にライティングを折り重ねていくことで、これを達成できるようになると思う。だからこそライティング教育科目以外の科目でのライティング指導の積み重ねが重要ではないか。

Q. いわゆる大綱化によって一般教育、教養部という段階が消滅して以降、ともすれば調査、実験を重視する学科の学生は、経験するレポートが計量的なものに偏りがちになっているように感じる。

一般教育、教養部のプラス面がなくなって、この隙間をどのように埋めればよいのか、ということに悩んでいる。

- A. 解答がない、広い観点から人間のありようをかたるのはなかなか難しい。この難しい状況の中でもなんとか、これを訓練する方法の一つとしては、多様な文献から自分と違う視点のものと比較させることを課すという方法もあるのでは。

また先ほどの回答の繰り返しになるが、一般教育、教養部はなくとも、4年間のカリキュラムを通して (**Critical thinking across the Curriculum, writing across the Curriculum**)、その学生にどのような人間形成の道を備えるかということが重要。これは教員だけでなく、職員の指導もかかわる。

総括

2014年度のFD講演会では、初年次教育に焦点を合わせ、「書く力」の指導法について研修しました。後期は、井下先生のご講演を受け、学内からも4名の方々が現状の報告などをして下さいました。お忙しい中、ありがとうございました。各部署のご苦勞と奮闘のお姿を拝見させて頂いていた思いでいます。

フランスの博物学者ビュフォンは「人は文なり」と申しました。文章には、その人の思想や人柄が表されており、文章を見れば、書き手の人となりが見える、ということでしょうが、学生たちは「書く」経験が少なく、修練が不十分です。ですから、自分のいいたいことが何で、それをどのように書けば読み手に伝わるのか、を学習する必要があります。私たちは、学生が「知識を再構造化する力（自分の考えを自分の言葉で表現する力）」を育成できるよう、新たな思いで励みたいと思います。

今年度を受け、次年度は、レポートの返し方や指導（自己点検評価シート）の導入もせねばならないと思っています。合わせて、全学的なカリキュラムの、また、一般教育・教養課程の見直しが必要であると思っています。

ある博物館の学芸員が、恐竜の骨を掘り出すことは「汗」「血」「涙」を流すことといたしました。重労働で汗を流し、作業で血を流し、最後は辛さと報いの少なさに涙を流す。FD活動の実践には、さまざまな困難が伴い、まさに「汗」「血」「涙」を流すことのように感じていました。しかし、皆様のご協力の様子を見ていて、最後の「涙」は心から感謝の涙を流す、ということでもあると、思うようになりました。FD活動は教職員の皆様のご理解、ご協力なしでは推進できません。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

教務部長・大学FD委員会副委員長 藤本 朝巳

4

授業アンケートの再構築

2013 年度からの検討課題としていた授業アンケート実施方針の見直しを進め、質問項目の検討、設計からデモ版による予備調査までコミュニケーション学科の協力を得たうえで、2014 年度後期から下記のとおり変更しました。

期待される効果としては、授業をタイプ別に分類できるよう設計しているため、分析により授業科目の特性（タイプ）別に学生の意見、学生への影響など特徴を把握できるといった点があげられます。

	2014 年度前期まで	2014 年度後期から
目的・内容	授業運営の状況・授業改善の把握 学期後半の運営に活用	① 学習者の自己評価・成長に焦点を当てる。 ② 授業への要望は①と区別して実施
設問	授業の実態を問う内容が大半	授業をタイプ別に分類できるよう設計
実施時期	授業期間中 7月4日～7月18日	目的①のためのアンケート ：授業期間終了後 成績通知時 卒業年次生 2月23日～3月31日 在学生 3月25日～4月10日 目的②のためのアンケート ：授業期間中 11月20日～1月27日
対象	全科目	全科目
方法	Web（本学ポータルサイト）	Web（本学ポータルサイト）

5

セミナー参加報告

	プログラム名	参加者	期間
1	平成 26 年度 FD 推進ワークショップ(専任教職員向け) 高校生が大学 1 年生に成長するために ～高等学校教育との円滑な接続と大学教育の 質的転換～	富樫 剛 (文学部英語英米文学科教授) 高柳 彰夫 (国際交流学部国際交流学科教授) 谷口 昭弘 (音楽学部音楽芸術学科准教授) 今福 洋一(大学事務部教務課) 藤井 真理(大学事務部総務課) 太田ちひろ(大学事務部教務課)	6月21日(土)
2	平成 26 年度 FD 推進ワークショップ(新任専任教員向け) 大学教員の職能開発と FD	田中 里奈 (文学部日本語日本文学科准教授)	8月8日(金) ～9日(土)

I. グループ・セッション (グループ B)

1. 高大連携について、積極的な立場からの発言

拓殖大—理工系の学部の場合、数学・科学・物理の基礎が理解できていなければ3-4年次の研究に直接支障をきたすことになるので、リメディアル的なプログラムを早い時期から推進してきた、とのこと。具体的には、入学前教育(課題の送付と添削)、学習支援センターによる正課外の補習プログラム(TA/SAを使用)の実施など。

京都産業大—付属高校との接続授業を実施。内部進学コース生対象、高校2-3年。特に3年生に対しては大学の授業を一部開講し、合格者には入学時に2単位を認定。

西南学院大学—(法学部のみ)推薦入試合格者に対して入学前指導を実施。内容は現代文と基礎英語で、eラーニングによる自主学習が中心。

2. 高校の立場

函嶺白百合学園中学高等学校—教育に関する社会の風潮や中高生の気質が変化してきているなか、学習・生活両面においてどのように生徒を指導していくべきか模索中。

3. 高大連携を含む、現行の大学FD活動に懐疑的な立場からの発言

白鷗大—7割方が営業関連の職についていくなか、実際に社会的に要求されているのは円滑な人間関係をつくる力であり、その基盤や手段としての人文的な一般教養をより重視すべき。(この方は昨年度までずっと就職課への配属であったとのこと。)

フェリス学院大学(富樫)—PDCAサイクルを中心とする現在の高等教育モデルは、おおいに見直される必要があるのでは。学生は製品ではなく、個性のある主体であるから。

4. 座長のまとめ

- 人文系・理工系の違いは、やはりあるのではないか。
- 制度的な改善への志に加え、学生個人の成長を願う気持ちがなければ、よい教育はできないであろう。(座長は、懇親会における乾杯の辞のなかでも、この発言をくり返していた。)

5. その他の発言

- 志願者減少の問題—実学を謳っても受験生は増えない。
- 志願者の学力レベルの問題—就職率が高くても、偏差値は上がらない。

II. 全体での総括(各グループによる報告から)

- 学生の基礎学力の低下は否めない。が、同時に多様化もしている。
- 学生の達成感を刺激する授業案を。
- 入学前教育をおこなっているが、学生からの反応は低調。
- 成績評価の平準化を目指している。(←個人的には、これを推し進めすぎると、各専門領域・各授業の個性・特性が失われてしまうように思う—富樫)
- リメディアルと同時に、優秀層を伸ばすような初年次教育も。
- 高大における役割分担を明確にしては(高校:基礎、大学:専門 + 発展)
- 付属校があっても接続はしばしば困難。
- 初年次教育は、下位10%を対象におこなっている。
- 入学前教育は不要では? 入試広報的すぎないか?
- 初年次教育においても、世話をしすぎでは? 社会的自立が大学教育の目的であるはずなのに。
- 有償での入学前講習を実施。
- 初年次教育に力を入れたら就職率が上がった。
- 学生のコミュニケーション能力を向上させる機会として、職員も初年次教育に参加しては?

- 入試の多様化が、学力や意欲の差を招く。
- 2:6:2 (下位:平均:上位) の6の部分にいる学生たちに対する指導が重要なのでは。
- (FD 推進ワークショップ運営委員長のまとめ) 教育改革において、何をしたらどのような成果が上がったか、では次にどうするか、ということを考えつづけることが重要。
(← 個人的には、このようなスタンスは、あくまで参考資料の蓄積というレベルにとどめるべき、と考える——富樫)

報告2 「私大連FD推進ワークショップ」(専任教職員向け)参加記録

高柳 彰夫

6月21日(土)に私大連のワークショップに参加した。実際に議論されたのは主に高大連携と初年次教育であった。本学、特に国際交流学部に関連したことを中心にまとめておこう。

1. 推薦入学合格者などの入学前教育について

推薦入学など秋入試合格者は一般入試合格者に比べ学力その他が低く、各大学で困っているようで、推薦入試の入学者の比率が高い大学ではかなり深刻である。入学前教育も強制することは難しい実態がある。「秋入試で進学先が決まった生徒も他の生徒と同じ勉強をさせたいので、入学前教育はお断り」という高校もあるとのことである。スクーリングを課す場合は、高校の授業とどちらを優先させるのか、責任の所在(移動の際に事故の場合など)、特に遠方の入学予定者の場合は交通費をだれが負担するのかなどさまざまなことで高校と対立するケースすらある。

私自身、高校訪問で、推薦入試にあまり積極的でなく、「学校側からは声をかけない。生徒の側から希望があって基準を満たしていた場合は推薦書を書く。合格して進学先は決まってもセンターは受験させる」という高校が少なくないを見てきた。今回聞いた高校との対立は「ありそうな話」だと思ったし、本学は一般入試入学者を多数派にすることは継続すべきことであると改めて思った。

2. 初年次教育(国際交流学部の導入演習が該当)関係のこと

初年次教育では多くの大学で「2-6-2」問題(優秀で初年次教育が必要でなく退屈気味になる学生2割、普通の学生6割、学習困難な学生2割)があり、どの学生に焦点を合わせるのかが議論された。国際交流学部の導入演習ではあまり「2-6-2」といったことを感じたことがない(自分のクラスでは2割くらい退屈気味の学生がいる一方で、下2割に該当するような学生は2-3年に1人いる程度)が、意識してこなかったからかもしれない。前期の残りの1か月は自分のクラスで気をつけてみたが、上の2割は確かにいるが、下の2割の問題は感じなかった。R&R(文学部)、導入演習(国際交流学部)担当で「2-6-2」問題は存在するのか、情報交換は必要だと思う。

一方で新入生の「多様化するニーズ」に対応して「面倒見をよくする」とますます学生が自立しなくなり、何でも大学頼みの学生が増える悪循環は各大学で悩んでいる。

最後にワークショップ基調講演で出た気になる情報を一つ。高校卒業生の「高等教育志願率」が2010年の61.75%をピークに、それ以降下がり、2013年は60.33%、理由はまだ解明されていないとのことである。

報告3 「私大連FD推進ワークショップ」(専任教職員向け)参加記録

谷口 昭弘

TKP市ヶ谷カンファレンスセンターで開催された平成26年度FDワークショップは、高等学校までの教育と大学教育の間のギャップをなくしスムーズに後者での学びが行えるようにするには、どのような施策を大学が取ることができるのかをテーマにしていたようである。特に大学1年目を迎える学生を対象に、あるいは彼らが入学する前から積極的な働きかけをする必要性を問かけるものであったともいえるだろう。まず早稲田大学の沖清豪氏による問題提起は、この「初年度教育」が、そもそも教職員が一体となって取り組むべきものだという前提から始められており、その共有前提知識を筆者が全く持ち合わせていないことを実感させられた。また大学入試に向けての高校の暗記型学習から問題提起とその解決を模索する大学での学

びへの転換、そして大学での学びから卒業後の社会に応用できるコミュニケーション、プレゼンテーションの能力の開拓という大学における2つの教育機能について多面的に考えさせられた。

その後のグループ討議においては、全国からFDに関心を持った教職員が集まり、事例報告や議論の時間が設けられた。特に関心を持ったのは、フェリスの音楽学部ではまだ行われていない入学前教育で、久留米大学からはインターンシップなど地域での学習を通して大学に必要な問題発見や上記に言及した能力などを身につけるといった事例が紹介された。そのほかの大学からも、AO入試と推薦入学の学生対象に国語・数学・英語の対面授業を行ったり、2・3回の課題やレポートの課題提出を課したり、90分授業に慣れる試み等が紹介された。

入学後についても外部業者と協力して基礎学力調査(国語、数学)を実施する事例が紹介された。点数の低い学生には「ステップアップ講座」を受講させ、それを受講しないと1年次の必修科目の単位がとれないという。

これらの事例・方策がフェリスで導入可能かどうか、あるいは本学の学習形態に合っているのかについては検討が必要ではあるものの、今後の方向性を考える上では参考になるアイデアが様々に提示されたし、また現場からの悩みを共有することもできた。有意義な機会を与えられたと認識している。

報告4 「私大連FD推進ワークショップ」(新任教員向け)参加記録

田中 里奈

2014年8月8～9日に静岡県浜松市において開催された私立大学連盟主催の新任教員向けFD推進ワークショップに参加した。プログラムは、(1)パネルセッション、(2)グループ討議、(3)ワークシートの作成および模擬授業の実施とディスカッション、という構成であった。以下、簡単に内容を報告する。

(1) パネルセッション

昨年度の参加者によるパネルセッションが行われた。FD推進ワークショップに参加して、自身の授業がどのように変化したのか等に関する報告が行われた。

(2) グループ討議

翌日、模擬授業をともに行うグループで集まり、現在所属している機関での教育内容や授業に関する意見交換を行った。それぞれ教育面においてどのような悩みや葛藤を抱えているのか、学生とのコミュニケーションでどのような点に気づいているか等に関して、ディスカッションを行った。そこで共有された内容としては、学生の意欲をいかに高めながら授業を展開させていくか、そのために、いかに学生を授業に巻き込み、積極的な参加を促すような授業をデザインしていくかなどであった。コメントシートの配布やマイクを使用して教室内を自由に移動し机間巡視をすること、グループワークを中盤に取り入れるなどの実践例が出された。

(3) 模擬授業の実施

それぞれ15分程度の模擬授業を実施し、その後、よかった点・改善点等をディスカッションした。自ら模擬授業をする機会を得て、授業に関するコメントをいただいたことにより、授業を客観的に振り返る機会となった。また、研究領域・分野の異なる教員の方々の模擬授業を見せていただく機会を得たことで、(2)で論点となった「学生の参加を促すための多様な工夫」を実際に目にすることができた。

2日間のFDワークショップ参加により、授業運営の手法がすぐさま劇的に変化するという事は難しいと思われるが、常に授業を振り返り、授業をよりよいものにしていこうとする意識の強化は確実に図られると思われる。学内でもこうした機会を設けることにより、よりよい授業展開を学ぶ機会を創出することができ、継続した教育能力の養成が可能となるのではないかとと思われる。

期間	テーマ、トピック	主催
4月～1月	授業アンケート見直しに係る検討	大学 FD 委員会
4月～1月	科目ナンバリング制導入に係る検討	大学 FD 委員会
5月8日(木)～6月3日(火)	専任教員による授業参観	大学 FD 委員会
7月4日(金)～7月18日(金)	前期 Web 授業アンケート実施	大学 FD 委員会
7月23日(水)	第1回 FD 講演会	大学 FD 委員会
9月27日(土)	2014 Ferris English Teachers' FD Workshop	英語教育運営委員会
10月6日(月)～10月24日(金)	専任教員による授業参観	大学 FD 委員会
10月22日(水)	第2回 FD 講演会	大学 FD 委員会
11月～1月	カリキュラム・マップ Ver.3 作成	大学 FD 委員会
2月23日(月)～3月31日(火)	後期 Web 授業アンケート実施(卒業年次生)	大学 FD 委員会
3月25日(水)～4月10日(金)	後期 Web 授業アンケート実施(1～3年次生)	大学 FD 委員会